

## 「道八沖ナリ」——器と亀裂についての断章

稲賀 繁 美

『茶の本』(一九〇六年)は「一椀の人間性(A cup of humanity)」を巻く章から始まる。それに先立つ『日本の覚醒』(一九〇四年)は「人間性の暗闇(Dusk of humanity)」を憂いつつ閉じられていた。暗闇の奥には、こうして小さな「一椀の茶(a cup of tea)」という灯が点る。日露戦争直後のポストン。そこで岡倉覚三は、このひと椀の器(cup)のうちに東洋美学の原点を探ろうとした。The Book of Teaは覚三没後一〇〇年を迎えて、海外でも版を重ねる。だがその著作は、なぜ侘茶の宗匠・利休の自刃によって閉じられていたのか。

茶を喫するには椀が不可欠である。椀とは一般に液体を盛る容器だが、それを「うつわ」と訓じれば、そこには掌の窪みを作る空虚な丸い凹みが見える。その窪みを模り、粘土を手で捏ねて整形し、焼成したものが焼き物の起源となる。「うつわ」とは「うつろ」なる「わっぱ」(杉などの曲木によって作る器)でもある。また「うつほ」は樹木の幹に出来る「空洞」の訛ともされるが、空の壺とも読める。「靱」あるいは「空穂」とも綴られ、筒状の鞘を指す。矢を収納する道具であり、後には船となる。「うつけ」は「空け」と漢字を当てて、空っぽの状態を意味し、転じて愚か者を指す。内容物の抜けた容器そのものは、字義からして無内容でしかあるまい。だがその空虚にこそ意味充実の場が生まれる。そう議論を転倒させたところに岡倉の『茶の本』の眼目もあった。「戸牖を鑿って以て室を為す。其の無に当って室の用有り」(『老子』上篇第一章)。原典は穴居の描写のようだが、木造家屋ならば壁や屋根が建築を成すのではない。茶室はあくまで空虚な器、emptyだからこそ、招かれた客人たちは内実を満たす。主人と客人との集いと接触のうちに、一期一会、人間性の灯が宿る。和語の意味連関では、「うつろ」は「うつろひ」から「うつりし」へと接続する。器は変わらずともその中身は移ろってゆく。また器の中身を移し変えるのは、日常の営みである。「うつぼ舟」は死者を現世から来世へと運搬する棺でもあるが、そこには空虚と移動とが重ね合わせとなっている。須恵器の甕棺などは、卵型

の形状をもち、あたかも胎児を育む子宮を象った帰還カプセルを思わせる。ここで興味を惹くのが「うつせみ」だろう。「うつしみ」といえば「現身」「顕身」の訓であり、『万葉集』などでは、現世の生身を指す枕言葉だった。だが仏教的無常観の浸透とともに、人の世の移ろいややすさの意を含むようになり、「空蟬」の字が当てられた。蟬の幼虫の抜け殻は儂い命を暗示する。空と現とは「うつし」を介して透過する鏡像関係にある。ここまで見てきた事態を欧米語に置き換えるかどうか。日本語の意味連関のなかでは、vacuie(空隙)・vide(空虚)・neant(無)といった観念は passage(移動)・transposition(置換)・duplication(複写)といった観念の近傍にあり、その意味場にあつては、生死や虚実が容易に相互に転移往還する性質を帯びていることになる。言い換えればそうした意味の「移ろい」を許す言語・語彙空間として日本語という「器」がある。『源氏物語』も語るように、「空蟬」越しに、現(presence)と不在(absence)は、表裏一体に循環する。

こうした意味空間では、例えば原作(original)と複製(copy)との対立といった枠組みは容易に根拠を喪失する。コピーとしての「うつし」は、同時に生身をも意味するのだから。また漢語ならば区別されるべき機能も、同一の語彙に未分化のまま凝縮されている。「うつる」は映、写、転、移、遷、換などの概念を包括しており、「病がうつる」のような伝染作用、さらには靈魂が乗り移るといった憑依現象をも除外しない。『源氏物語』では葵の上に取憑いた六条御息所の生霊は、悪霊除去の加持祈禱で撒かれた芥子の移り香すら帯びて帰還する。憑霊現象が幻覚に過ぎないなら、臭気まで伝染して「うつる」はずもあるまい。

ここで感応性の問題に「うつる」。『茶の本』には伯牙の琴馴らしの逸話が見える。洛陽郊外は龍門の桐の大木から作られた琴は皇帝に献上されたが、どんな名手の腕にも応えない。だが伯牙が奏でると、その琴が生き返った。忘我の境地を味わった皇帝がその秘訣を尋ねると、伯牙はこう答える。ただ琴が選ぶに任せただけのこと。演奏のさなか、もはや琴が伯牙か伯牙が琴かの分別も付かなかった、と。岡倉はこう敷衍する。「芸術における精神の出会いほど聖なるものはない。出会いの瞬間、芸術愛好者は自らを超越する。彼は彼であり、しかも彼でなく」と。At once he is and is not——彼は、存在しつつ不在となる。後に岡倉は同じ忘我の境地

を漢詩にこう託す。「物ヲ見ルニ畢ニ吾ナシ」と。この瞬間、人は「無限を一瞥する(catches a glimpse of Infinity)」。伯牙が抱いた琴は、このとき、奏者の魂を奪い去り、それと共鳴する「器」と化していただろう。

現から虚へと移ろうには、我が身という器を空しくする必要がある。自己でありしかも自己でない状態は、人を個という小さな殻から解き放ち、無限の何たるかを、一瞬だが垣間見させる。忘我は *ecstasy* というが、これも語源として「自らの外に出る」脱魂状態を意味している。努めて平易な表現をとりつつも、岡倉は『茶の本』でこの境地を精緻に描いていた。そのことに気づいていた哲学者に、ほかならぬ九鬼周造がある。周造の母、初子は、覚三との許されぬ恋愛関係ゆえに、精神病院に幽閉されて後半生を過ごす。その息子は一九二八年、欧州滞在の最後の時期に、ポンティニーでフランス語による講演を行った(東洋における時間の回帰)と「日本芸術における無限の表現」。ここで周造は脱我(*hors de soi*)について語っている。そこには「我あり、而して我なし(*Je moi existe et en même temps le moi n'existe pas*)」とある。自我という器から自己が外へと「うつる」場面だが、その際に九鬼周造の念頭にあったのは、ほかならぬ『茶の本』の件の一節だったはずである。

空の器を媒介とする憑依と転生。だがそれは単純な連続的移行ではない。むしろそこには無限と有限との断絶の契機が介在する。岡倉は続けてこう述べている。「彼は無限を一瞥する。だが言葉は彼の歡喜を声にはできな。目には舌がないからである。物質の足枷から解き放たれて、かれの精神は物の韻律(*rhythm of things*)のうちに動く」と。言語を絶するこの亀裂を前に、自己と非自己との臨界は跨ぎ越される。この脱我状態は *kenosis* すなわち自己の意志を空しくすることによって神的な意志を受ける器となる魂の状態にも類比されよう。周知のようにそれはドイツ語で *Gelassenheit* と訳され、時に禅語で「放下」と訳されてきた。

だが「物の韻律」とは何か。これはその後一九二〇年代になって、「氣韻生動」としてあらためて注目された。「東洋美学」の要諦として復権あるいは過剰解釈される概念の先取りだった。神に憑依されるのが *enthusiasm* の語義。それは自我が宇宙と一体となる神秘体験でもあるが、その場を浸す「韻律」が *rhythm of things* の謂。「氣」はともすれば超自然的な迷信として毛嫌いされてきた。だがそれは思えば古代ギリシアでいう *pneuma*

に他ならず、ラテン語では *spiritus* に置換された。ヘブライ語の *ruah* は「息」「風」を原義とし「靈」に転じる。ユダヤ教の「神の息吹」がキリスト教では「聖靈」に読み替えられる。これが新約聖書のギリシア語では *pneuma* に相当する。呼吸をドイツ語では *Amen* と呼ぶが、これも梵語の *Anan* 即ち「宇宙の原理たる *Brahman* と対峙する「自我」と語源を共有する。生体が漂わす *aura* は、漢語の「氣」と一脈通じる。とすれば、これらの概念の流通を許す「うつわ」の運行と、意味の亀裂・断絶を契機とした「うつろい」の様態を探る *metaphor* の翻訳論が、改めて要請されることとなる――。

\*

地中海をフランス国境からスペイン側に抜けてすぐの海岸にポル・ボウの町がある。追跡の手を逃れて辿り着いたヴァルター・ベンヤミンは、この町の宿で服毒により自らの命を絶った。湾に面した小高い丘のうえには、ダニ・カラヴァンによる記念碑が知られる。だがそれは虚空に佇立する塔ではなく、地中に斜めにもぐり込む墓穴の羨道であり、眼下の水面へと誘う底なしの階段である。昇天ではなく下降。途中でガラスによって閉ざされた通路の彼方には、青い空と砕ける白い波が見える。訪問者は途上で断ち切られた通路に佇み、この赤錆びた歪な直方体、空虚な鉄の器に、充足すべき意味を探る。墓所に集った無名の来訪者たちの足跡と思念とが集約されて、死者を包む *aura* と化す。哲学者の絶たれた希望。その死出の旅に自らの生を寄り添わす刹那、闇の奥、心の空虚の底に、ひとつの灯火が宿る。利休の従容たる自刃が、翻訳者の使命と、時空を越えて交錯する。死による断絶を契機とした意味の移り行きと渡り(*migration*)のうちに、生気は、個人の生死という次元を超え、無限への際限なき転生を遂げる。そして「空虚な茶室」は、死出の旅路のための「器」を提供しつつ、永劫回帰の墓碑のありかを、地表の特異点のうえに、束の間、くっきりと印づける。

『茶の本』で岡倉は「道」を *passage* と訳している。「道ハ沖(底なしの器)ナリ」——「*The Way is like an empty vessel*」(A. Waley)『老子』(上篇第四章)。それは「うつろい」の道行きであった。